

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	李 博
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 日本落語と中国単口相声に関する比較研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	佐藤 利行	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	本田 義央	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	妹尾 好信	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	欧 文東 (国際関係学院)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、中国の大衆芸能の一つである単口相声と、それに対応する日本落語とを取り上げ、文献資料を中心に比較文化的見地から両者を比較対照して研究したものである。論文は序論、第一章「一人多役とその機能について」、第二章「中国笑話集に関わる中国単口相声と日本落語」、第三章「単口相声と落語の笑いの方法」、第四章「落語漢訳の可能性」、第五章「落語に基づく単口相声創作試論」、結論の全七章から構成されている。</p> <p>序論では、研究の背景と目的を論じ、日本の大衆芸能である落語・漫才・講談と中国の曲芸である相声・快板・評書を概括し、本論文で単口相声と落語とを比較研究する意義について述べる。</p> <p>第一章では、中国単口相声と日本落語について、演者一人が多種の役回りをこなすという共通点に着目し、演目の冒頭、本題、落ちの流れについての機能を文献資料に基づいて詳細に分析する。すなわち、演者みずからが第三者の口ぶりで叙述を展開するという両者の共通点はあるものの、単口相声が定場詩を喋りながら枕に入るのに対し、落語では観客への謝意から話を始めるということ、また落語にはあまり例のない演者本人が登場人物として本題を作成する例が、単口相声には多く見られることなどの相違点があることを論証している。</p> <p>第二章では、中国単口相声と日本落語とに大きな影響を与えた日中の笑話集である『醒睡笑』と『笑府』を取り上げる。単口相声には『笑府』に取材するものが多く見られるように、同様に落語の「子ほめ」「平林」「たらちね」等は『醒睡笑』に、「饅頭怖い」「三軒長屋」「松山鏡」等は『笑府』に取材するものである。このように単口相声や落語には『醒睡笑』『笑府』を題材としているものが多く見られる。こうした中で、『笑府』の「鏡を見る」(看鏡)が単口相声の「間抜けなやつ」と落語の「松山鏡」の両方のネタとなっているのが唯一の例外であることを指摘し、両者の内容について丹念に検証している。</p> <p>第三章では、中国単口相声と日本落語との笑いの方法について、曲解・反復・誇張・婉曲・曖昧・逸脱・強化・詭弁・掛詞の九種類に分類し、それぞれの方法について、単口相声と落語の作品を取り上げて丁寧に説明する。その結果、こうした九種類の笑いの方法を組み合わせることによって、予想もできないような突発的な効果が生まれ、一般的なものから例外へ、また主流から極端</p>			

へ、という変化が生じて、それが巧みに笑いを誘っていることを論証する。

第四章では、これまで例を見ることのない日本落語の中国単口相声への翻訳の可能性を論じている。落語「平林」の「たいらばやしかひらりんか、いちいちじゅうのもくもく、ひとつとやっつでとっきっき」という日本語独自の言い回し、「子褒め」の「只(ただ)の酒」「灘(なだ)の酒」といった語呂合わせなど、漢訳する上で非常に困難なものが多くある。これらの難点を解決する漢訳をこの章では試みている。

第五章では、落語「みどりの窓口」を手本として宅配屋に関する単口相声の創作を試みる。落語の題材から単口相声を創作する際には、第三章で取り上げた九種類の笑いの方法を脚本に導入すること、肯定的人物の描写では褒め言葉を多用するよりも反対の面を描写することで主題が引き立つ(否定的人物の場合は短所を限りなく暴露することで却って主題が引き立つ)こと、登場人物の立場を変化させる場面を再現することが重要であるとする。

結論では、本研究をまとめ、今後の課題について述べる。

以上、本論文は、これまで取り上げられることのなかった中国単口相声と日本落語との比較対照研究であり、文化の異なる中国と日本との伝統芸能を対象とした研究としての試みは高く評価できる。音声として演じられる単口相声と落語を文献を資料として論じる点、第二章で取り上げた共通の題目以外の作品の分析など更に論証しなくてはならない課題も残るが、筆者自身が中国伝統芸能の快板の演者であり、今回取り上げた単口相声と落語以外にも対口相声と漫才など、更に今後の研究の進展が期待される論文である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(文学)の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)